

## 中世後期～近世初期イングランドの俗語歌謡

——写本群の分析から

上野未央\*

### A Survey on English Carol Manuscripts

UENO Mio

#### abstract

The aim of this paper is to reorganize English carol containing manuscripts and printed books that were produced between the thirteenth and sixteenth centuries, which total 103 in number.

When rearranged in chronological order, it becomes clear that only clerics recorded carols from the thirteenth to the fifteenth century, with lay writers appearing from the sixteenth century onwards.

Carol manuscripts were almost exclusively owned by clergy during the thirteenth and fourteenth centuries, with lay people began to own carol manuscripts from the fifteenth century onwards. One particular owner of a fifteenth century carol manuscript was a minstrel, and he may have used the carols in the manuscript in his repertory. Examples of greater numbers of lay owners of carol manuscripts must reflect the rise of literacy and education during the late Middle Ages.

Also, up to the sixteenth century, carols were recorded among sermons and Latin verses, which suggests that carols were used in teaching. However, other manuscripts from the fifteenth and sixteenth centuries collected mainly carols in preference to other items. Some carol manuscripts were enjoyed in the royal court. Thus, it appears that a wider variety of carols were performed during the fifteenth and sixteenth centuries.

Moreover, carols may have been influenced by the context of where and to whom they were performed. In future, I should like to focus on the changes in the meanings of carols over time.

Keywords : Late Medieval England, Manuscript Studies, Cultural History, Lyrics, Carols

#### はじめに

イングランドの俗語歌謡の一種であるキャロル (carol) は、13世紀から16世紀に作成された103の写本・印刷本に残っている。それら、キャロルを収めた写本群 [以降、本稿ではキャロル写本 (群) とする] の大半が15世紀に作成された。そのため、キャロルは、英文学史上、15世紀における英詩の発展を特徴づける文学形式として位置づけられてきた<sup>1</sup>。

キャロルは、歌われた内容ではなく、形式により定義される。たとえば、15世紀の写本には次のようなキャロルが収められた。

[バーデン]ヘイ、ホー。おろかな人々よ。神はあなた方を助けてくれる。(以降、各詩節の終わりに繰り返し)

---

キーワード：中世後期イングランド、史料論、文化史、歌謡、キャロル

\*平成14年度生 比較社会文化学専攻 (お茶の水女子大学 教育研究特設センター)

[第1詩節]ある日、争いが起こった／年老いた男と、彼の妻との間で。／彼女は彼の髭をつかんだ、大変強く。

[第2詩節]彼女はしっかりと髭をつかんだ。／そのために彼の両目から涙があふれ出た。

[第3詩節]扉の外へ／彼は出て行った。／そして隣人に出会った。／お隣さん、なぜ泣いているの。

[第4詩節]私の家には煙が充満している。／あなたも入ってごらん、きっと泣くだろう。<sup>2</sup>

複数の詩節からなり、バーデン (burden) と呼ばれる冒頭部を各詩節の後で繰り返す。これがキャロルの典型である。歌われたテーマとしては、聖書に題材を得たものが多かったが、上の例のように世俗の人々を主人公にしたものも残っている。歌われた場に関しては、14・15世紀に書かれた文学作品や、国王宮廷・教会などの会計記録から、キャロルは、祝日や宴会などの場で歌われていたことが分かる。キリスト教の祝日に宮廷で聖職者たちが歌った記録や、世俗の宴でミンストレルと呼ばれる芸人が歌った記録が残る<sup>3</sup>。

このように、キャロルは、聖職者や世俗の芸人によって歌われていたことが分かっている。しかし、これらの記録と、現存するキャロルのテキストとを直接結びつけることはできない。当然のことながら、記録されることのなかったテキストや、現在まで残ることのなかったテキストが存在したと考えられるためである。現存するテキストが書写された背景や、キャロル写本が所有された状況についての考察を経てはじめて、キャロルのテキストの中に何が反映されているのかを考察することができるのではないかと推察した。

歴史研究においては、中世後期の俗人の心性を示す傍証として、キャロルのテキストが部分的に引用されることがある<sup>4</sup>。しかし、キャロルのテキストに反映された心性の問題は、写本の書写状況や所有者層といった、テキストのおかれた文脈のなかで捉えかえされねばならないだろう。

以上の問題関心から、筆者はこれまで、15世紀後半に作成された、オックスフォード大学ボードリアン図書館所蔵のEng. poet. e. 1写本（本稿ではe. 1写本と略記）に焦点を絞り、史料論的分析を行ってきた<sup>5</sup>。e. 1写本は、キャロルとラテン詩を合計76篇収め、他のキャロル写本群とは一線を画している。キャロルは、説教のテキストや文学作品などと一緒写本に収められることが多く、キャロルをまとめて収めた写本は少ないためである。

e.1写本の史料論的分析の結果、書記は聖職者で、15世紀の所有者も聖職者・宗教団体であった可能性が高いことが分かった。また、ラテン詩を収めた部分と、キャロルを収めた部分とでは、同じ書記が書写しているにもかかわらず、書き方（レイアウト）が異なっていることが明らかになった。そのため、聖職者向けの部分と、俗人向けにもなりうる部分が書き分けられたのではないかと推察した。

本稿では、キャロルが歌われた場についての考察を深めるために、キャロル写本群全体に視野を広げる。それによりキャロル写本群の中世から近世への変化を探ることが可能になる。また、16世紀の写本群と対比させることで、15世紀のキャロル写本群の特徴を明確化することもできるだろう。

まず、現存する103のキャロル写本・印刷本を、内容構成の点から分類する。これらの写本群は、キャロルに関する代表的研究である、R. L. グリーンの *The Early English Carols* において、巻末の付録で言及されたものである<sup>6</sup>。これらの写本群のうち、チャーサーやリドゲイトなどの作品を収めたものに関しては、史料論を扱う研究で取り上げられることがある<sup>7</sup>。しかし、これらの写本群を、キャロル写本群として、まとめて捉えた研究は行われてきていない。本稿では、キャロルの歌われた場について考察するため、これらの写本群を分類・整理したうえで、誰がキャロルを書写したか、写本がどのように所有されたか、ということに焦点を絞ることとする。書記に関する議論からは、写本作成時における作成目的（何のために、どこで使うために作られたか）を推察することが可能である。また、所有者が判明している場合は、その人物が写本を所有した時点で、写本がどのように利用されていたのかということも推察することができる。

以上の手順で、16世紀までに作成されたキャロル写本群全体の変化を探る。それにより、中世後期から近世初期のイングランドにおいて、キャロルがどのように記録され、歌われていたのかを考察することが、本稿の目的である。

## 1. キャロル写本群の分類

キャロル写本群・印刷本を分類するにあたり、キャロルとともに文学作品や説教のテキストなどが収められ

ているのか、あるいはキャロルのみを収集した写本なのか、という視点に立って分類を行った（表1、2参照）。写本の構成内容は、その写本が作成された当時の利用目的と密着に結びついていると考えるためである。

その結果、(1) 説教のテキストや文学作品などと共にキャロルが書写された写本群、(2) キャロルとそれに類似する詩をまとめて収めた写本群に分けることができた。その他、上記の分類に入らないものとして、1、2葉のみ現存する写本の断片や、公的記録の裏にキャロルが書かれたものがある。

以上のように、おおまかな構成内容によって分類したうえで、キャロル写本群の変化を探るため、作成年代順に写本群を並べた。16世紀になると、キャロルを収めた印刷本が登場するため、16世紀のみ別表とした。

キャロル写本群の特徴を概観すると、「はじめに」で述べたように、文学作品や説教などと混在する形で、キャロルを1～5篇程度収めた写本群が多いことが分かる。15世紀には、キャロルやそれに類似の詩のみが収集された写本群が登場するが、文学作品や説教などの中にキャロルを収めた写本群に比べ、数は少ない。また、キャロル写本群の全体の数は15世紀後半に最も多く、16世紀後半には減っていったことが分かる<sup>8</sup>。

以下では、15世紀までの写本群と16世紀の写本群に分け、書記と所有者についての議論を整理し、キャロルがどのような目的で記録され、どのような場で歌われたのかということ考察したい。

## 2. 15世紀までのキャロル写本群

### 2-1 書記

書記が判明している最も古いキャロル写本は、14世紀後半に作成されたスコットランド図書館所蔵のAdvocates 18. 7. 21写本である。写本中の記述から、フランシスコ会修道士、グリムストーンジョン（John de Grimestone）が書写したことが分かる。この写本には、ラテン語の説教のテキスト232篇が、アルファベット順に収められた。説教のテキストに加えて、その英訳と、キャロル、キャロル以外の形式の英詩が収められた<sup>9</sup>。キャロルは3篇収められている。そのうち1篇はキリスト賛美をテーマとしており、2篇は聖母マリアが幼子キリストに子守唄を歌うものであった。これらのキャロルや英詩は、説教の前後に用いられたと推察されてきている<sup>10</sup>。

15世紀になると、コモンプレイス・ブックと呼ばれる写本群の中に、キャロルが収められるようになった。コモンプレイス・ブックは、備忘録とも訳されるが、覚え書きだけでなく、手紙や法的文書の書式から文学作品まで、様々な項目を収めたスクラップ・ブックのような性質を持つ。たとえば、15世紀半ばに作成されたケンブリッジ大学トリニティ・カレッジ所蔵のO. 9. 38写本は、グラストンベリ修道院で修道士が編んだコモンプレイス・ブックであると考えられてきた。この写本には、書記の名前は書かれていないが、写本のほぼ全体を、単一の書記が書いた。キャロルを書写したのも、同じ人物である。ラテン詩と3篇のキャロル（キリスト受難、連祷、宗教的教訓）、リドゲイトの詩、手紙の写しなどを収めている。その一通が、1433年という年代の入った、グラストンベリ修道院長の手紙の写しであるため、同修道院との関わりが指摘されている<sup>11</sup>。

次に、15世紀に作成された、キャロルがまとめて収集された写本群を見ていく。キャロルがまとめて収められた写本群のうち、書記や作成場所について、何らかの手がかりが残されたのは、2写本のみである。

そのうちの一写本は、15世紀前半に作成されたオックスフォード大学ボードリアン図書館所蔵のDouce 302写本である。この写本には、キャロル25篇と、キャロル以外の英詩や、ラテン語で書かれたキリスト教の儀式に関する文章が収められた。写本内の記述によれば、この写本に収められたキャロルは、ジョン・オードリー（John Audelay）という、シュロップシャー、ハウモンドのアウグスチノ会修道院の礼拝堂付き司祭が作成したものである、という。オードリーのキャロルの大半は、聖書に題材を得たキャロルと、宗教的教訓を歌うキャロルであった。オードリー自身が書記であったのかどうかは分からないが、宗教団体のもとで書写されたと考えられる<sup>12</sup>。

また、15世紀末に作成されたケンブリッジ大学図書館所蔵のEe. 1. 12写本には、賛歌の英訳とともにキャロルが100篇以上収められた。カンタベリのフランシスコ会修道士ジェイムズ・ライマン（James Ryman）が書写し、キャロルのほとんどを、ライマン自身が作成した。ラテン語のフレーズをバーデンとして使う、聖母マリア賛美キャロルが大半を占める。この写本に収められたキャロル群は、先に見たグリムストーン写本（Advocates 18. 7. 21写本）と同様、説教で用いられたと考えられてきた<sup>13</sup>。3篇のみキャロルが収められたグ

リムストーンの写本と比べると、ライマンの写本では、キャロルを「収集する」ことが意識されていたと考えられる。

ここまですべてをまとめると、ラテン語のテキストなどと混在する形でキャロルを収めた写本、キャロルをまとめて収めた写本のどちらを見ても、書記が判明しているものは、聖職者が書写していた。したがって、15世紀までに書写されたキャロルのテキストの大半には、聖職者の意図が反映されているといえるのではない。

しかし、書写されたキャロルの聴衆について考えてみると、説教に使うためにキャロルが書写された場合には、俗人の聴衆が想定されていたと考えられる。その場合は、キリスト教の教義を俗人に分かりやすく伝えるために、キャロルが利用できると考えられたのではないだろうか。

## 2-2 所有者

次に、15世紀までのキャロル写本群の所有者を見ていく。聖職者が書写したことが判明している写本群に関しては、作成された当初は、書記自身が所有していたと考えるのが自然である。

写本が作成された後で、書記とは別の人物に所有されたことが分かる写本もある。たとえば、14世紀に作成されたロンドン大学 657写本には、15世紀の所有者としてノーフォーク、ブラックニーの教区司祭ロバート・ダィヤー (Robert Davyer) の名が記された。この写本には、キリスト降誕を主題とするキャロル1篇とともに、説教のテキスト、キリスト教の教義に関するラテン語の文章、ミサの際に教区司祭が行うべきことを記した英語の文章などが収められていた<sup>14</sup>。

また、15世紀前半に作成され、キャロル57篇とその他の詩が合わせて74篇収集された、大英図書館所蔵の Sloane 2593写本には、キャロルを書いた筆跡とは異なる15世紀の筆跡でジョン・バーデル (Johannes Bardel) という名前が書かれた。これは所有者の名前であると考えられる<sup>15</sup>。この人物は、15世紀のオックスフォード大学ボードリアン図書館所蔵の Holkham Misc. 37写本の書記、ジョン・バーデルと同一人物である可能性が指摘された<sup>16</sup>。Holkham Misc. 37写本の書記であったバーデルは、ベリー・セント・エドマンズのベネディクト会修道会の修道士であった。したがって Sloane 2593写本は15世紀において、修道士に所有されていたと考えられる。

Sloane 2593写本には、聖書に題材を得たキャロルだけでなく、世俗の人々を主人公にしたキャロルも収められている。これは、キャロルをまとめて収集した15世紀の他の写本 [e. 1写本、ケンブリッジ大学セント・ジョーンズ・カレッジ S. 54写本] にも見られる特徴である。また、この3写本群は小型で、装飾がほとんどないという共通点を持つ。Sloane 2593写本が修道士によって所有されていたのなら、よく似た写本である e. 1写本や S. 54写本も、15世紀の時点では、聖職者のもとにあった可能性が高いといえる。

また、キャロルが収集された写本群のうち、多声音楽の楽譜が付いている写本群は、宗教団体のもとに置かれたと考えられてきている。たとえば、大英図書館所蔵の Egerton 3307写本には、写本内に、ヨークシャーのシトー会ミューズ大修道院 (Meaux Abbey) の名前が記されていることから、同修道院に置かれたと考えられている<sup>17</sup>。また、オックスフォード大学ボードリアン図書館所蔵の Arch Selden B. 26写本は、写本中の記述から、ウスター大聖堂 (ベネディクト会) で聖歌隊が使っていたと考えられてきた<sup>18</sup>。これらの写本群は、歌い手が「楽譜を見て歌う」ことが考慮されて作成されたと考えられるため、聖歌隊が使っていたと考えるのは自然であろう。

聖職者や宗教団体のもとに置かれていた写本だけでなく、俗人の手に渡ったキャロル写本も見られる。先述した、ジョン・オードリーのキャロルを収めた Douce 302写本は、作成された当時は宗教団体か聖職者に所有されたと推察される。しかし、写本内に、15世紀後半に当該写本を所有した聖職者が、W. ワイアット (Wyatt) という minstrel からこの写本を譲り受けたという記述がある。さらに、別のフォリオに、「コヴェントリの minstrel、ウィリアム・ヴィアット (Vyatt)」という名前が書かれている<sup>19</sup>。ワイアットとヴィアットは同一人物である可能性が高い。これらの記述から、コヴェントリの minstrel、ワイアット (ヴィアット) が当該写本を一時期所有し、それを聖職者に渡したことが分かる。聖職者が作成した写本が、俗人の手に渡り、その後、再び聖職者に渡されたのだと考えられる。minstrel は、当該写本を所有していた時に、写本内のキャロルを自らのレパートリーの一部として歌っていたのかもしれない。

ケンブリッジ大学図書館所蔵の Ff. 1. 6 写本も、俗人が所有していたと指摘されている。この写本は15世紀後半に作られ、恋愛をテーマにしたキャロル2篇とチャーサーやガウワーなどの詩・物語を収めた。写本内の記

述から、15世紀の時点では、ダービーシアのジェントリ、フィンダーン (Fyndern) 家に置かれていたと考えられている<sup>20</sup>。また、この写本には、Elisabet KotonとElisabet Frauncysという名前が書かれているため、これらの女性が所有したことがあると考えられてきた<sup>21</sup>。この写本には、宮廷風恋愛詩の影響を受けた恋愛キャロルが収められており、写本制作の時点から俗人が関わっていたと推察されている。写本の内容構成は、中世後期にジェントリや裕福な商人が所有した写本群の内容と類似している<sup>22</sup>。

ここまでをまとめると、キャロル写本群の15世紀における所有者の多くは、聖職者・宗教団体であった。しかし、15世紀の時点で俗人の手に渡った写本も、少数ではあるが、存在した。Douce 302写本の例からは、聖職者が書写したキャロル写本を、聖職者だけでなく、俗人も使った可能性が示される<sup>23</sup>。

また、ジェントリが所有したと推察されるFf. 1. 6写本の例は、聖職者によって利用されてきたキャロルという文学形式が、宮廷文学に親しんだ俗人たちの文化の中に組み込まれたことを示唆する。

### 3. 16世紀のキャロル写本群・印刷本

#### 3-1 書記・出版者

16世紀になると、宮廷風恋愛詩を収め、先に見たFf. 1. 6写本と類似した内容構成を持つキャロル写本が増えた。そのような写本群には、大英図書館所蔵の3写本群 (Add. 17492写本、Add. 31922、Royal Appendix 58写本) などがある。これらの写本群には、チャペル・ロイヤルの音楽家や国王ヘンリ8世の名前が、キャロルの作詞・作曲者として書かれている<sup>24</sup>。書記の名は記されていないことが多いが、これらの写本群の書写には、俗人が関わったと考えられている<sup>25</sup>。

また、16世紀前半には俗人がキャロルを「収集した」例が見られる。オックスフォード大学ベイリオル・カレッジ所蔵の354写本は、ロンドン市民で食料雑貨商のリチャード・ヒル (Richard Hill) が編んだコモンプレイス・ブックである。覚え書きや法的文書の書式とともに、聖書に題材を得たキャロルや世俗の人々を主人公にしたキャロル、キャロル以外の形式の英詩が収められた<sup>26</sup>。収集されたキャロルの多くは、14・15世紀の他の写本群に収められたキャロルと同じものであった。ヒル自身が、他の写本群から書写したと考えられる。

また、16世紀になると、キャロルが印刷本に収められるようになった。たとえば、リチャード・キール (Richard Kele) が1550年ころロンドンで出版したパンフレットには、4篇のキャロルが収められた<sup>27</sup>。そのうちの1篇は、14世紀の写本 (グリムストーンのジョンが書写した写本) に収められた英詩を、キャロルに作り変えたものであった<sup>28</sup>。この英詩は15世紀の写本群にも書写されている。キールは、他のキャロル写本群を参照してパンフレットを作成したのではないだろうか。キールとヒルの例からは、16世紀のロンドンにおいて、キャロル写本群がある程度俗人たちの間に流布していたことが推察される。

#### 3-2 所有者

16世紀には、キャロル写本群の所有者にも変化が見られる。キャロル写本群の多くが、俗人に所有されるようになったのである。先述したリチャード・ヒルのコモンプレイス・ブックは、ヒル本人が所有していた。また、キャロルを収めた印刷本も、世俗の人々の手に渡ったと考えられる。

15世紀後半から書写されはじめ、16世紀には俗人が所有したことが分かる写本もある。イエール大学図書館 (Beinecke Rare Book and Manuscript Library) 365写本である。この写本は、受胎告知キャロル、聖史劇のテキスト、聖人伝、法的文書の書式などを収めたコモンプレイス・ブックである。この写本に、サファクのジェントリ、コーンウォリス家の使用人であったロバート・メルトンが16世紀初頭に会計記録を書き足した。この会計記録から、16世紀初頭には、コーンウォリス家に置かれていたと考えられる<sup>29</sup>。

また、宮廷詩人やヘンリ8世の作品などを収めた写本群は、ジェントリが所有していたと考えられる。たとえば、16世紀初頭に作られた大英図書館所蔵Add. 17492写本には、3篇の恋愛キャロルが収められ、所有者として、ノーフォークのジェントリの家系に生まれ、アン・ブーリンに仕えたメアリ・シェルトン (Mary Shelton) という女性の名前が記された。シェルトンは、当該写本を一時期所有しており、写本内に詩を書き加えたとも言われている<sup>30</sup>。

また、16世紀初頭から半ばにかけて作られた大英図書館 Add. 5465写本には、チャペル・ロイヤルの音楽家ロバート・フェアファックスの紋章が書かれた。聖書に題材を得たキャロル、恋愛をテーマにしたキャロル計8篇と、その他の英詩41篇が収められた。全ての詩・キャロルに単旋律の楽譜が付されている。書記の名前は書かれていないが、単一の書記によって書かれ、作詞・作曲者となった宮廷音楽家たちの名前も記された。この写本は、フェアファックス家に置かれたと考えられている<sup>31</sup>。

このように、キャロル写本の所有者として、俗人が多く見られるようになった一方で、宗教団体に置かれたキャロル写本も引き続き存在した。キャロルが41篇収められ、多声音楽の楽譜が付された大英図書館の Add. 5665写本である。この写本は、エクセター近郊のプリムツリー (Plymtree) の主任司祭であったリチャード・スマート (Richard Smert) の作成したキャロルを収めていることから、エクセター大聖堂の聖歌隊が使ったのではないかと考えられている。当該写本には、恋愛をテーマにしたキャロルも収められた。エクセター大聖堂で、俗人の客をもてなす際に使われていたのではないかと推察された<sup>32</sup>。

以上のように、16世紀には、キャロルを書写する人々、キャロル写本を所有する人々、そしてキャロルを作成する人々の層が拡大した。これは、キャロルが歌われる場が拡大したことを意味するのではないかと推察される。

## おわりに

本稿では、イングランドの俗語歌謡キャロルを収めた写本群の分類・整理を行い、書記と所有者に焦点を絞って考察を行った。その結果、以下の3点が明らかになった。

まず、15世までは、キャロルが収集された写本群、文学作品や説教と一緒にキャロルが収められた写本群の両方で、聖職者がキャロルを書写したことが多かったことが確認された。すなわち、15世紀に書写された、キャロルのテキストの大半には、聖職者の意図が反映されているといえよう。

一方で、15世紀には、聖職者が収集したキャロルを収めた写本を、 minstrel が所有した例が見られた。この例は、聖職者が使うために収集したキャロルを、 minstrel が歌ったことを示唆している。写本が作成された当初から、俗人も含む幅広い階層の人々がキャロルの聴衆として想定されていたのではないだろうか。

第二に、キャロル写本群の16世紀にかけての変化が明らかになった。15世紀までは、俗人がキャロルを書写した例はほとんど見られないが、16世紀には、キャロルが俗人によって書写・収集・作成された例が見られる。キャロル写本群の所有者としての俗人も増えた。特に、富裕な都市民・ジェントリ層に、キャロル写本群の書記・所有者層が広がったといえることができるだろう。

16世紀における、キャロル写本群の書記・所有者、そしてキャロルの作者層の拡大は、中世後期から近世にかけてのイングランドのリテラシーや、教育の拡大と関係があるのではないだろうか。

第三に、キャロルの内容も、時代を経て変化したと考えられる。14世紀の写本中のキャロルは、聖書に題材を得たものがほとんどであったが、15世紀には、世俗の人々を主人公にしたキャロルが書写されるようになった。そして、宮廷風恋愛詩の影響を受けた恋愛キャロルが収められた写本も現れた。キャロル写本群の書記・所有者、キャロルの作者層の拡大に応じて、彼らが親しんでいた文化に影響を受けたキャロルが書かれるようになったのではないだろうか。

その一方で、聖書に題材を得たキャロルは、16世紀まで継続的に写本に収められていた。しかし、一見「変わらない」テーマであっても、キャロルが歌われる場—写本群の所有者や書記、聴衆—が変わることで、テキストの持つ意味が変わったのではないだろうか。時代や所有者の異なる、複数の写本に収められたキャロルのテキストが持つ意味の違いについては、稿を改めて考察したい。

## 註

1 Sadie, S. ed., *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, 2<sup>nd</sup> ed. (2001), vol. 5, pp. 162-72, esp. p. 162; Brown, C., *Religious Lyrics of the Fifteenth Century* (Oxford, 1952), p. xix; Woolf, R., *The English Religious Lyric in the Middle Ages* (Oxford, 1968), p. 383.

- 2 オックスフォード大学ボードリアン図書館所蔵、MS. English poetry e. 1 (図書館の所蔵カタログではMS. Eng. poet. e. 1と記される。本稿では、e. 1写本と略記)、f. 34v. 引用は筆者による試訳である。
- 3 Greene, R. L., *The Early English Carols*, 2<sup>nd</sup> ed. (Oxford, 1977), pp. xxx-xxxiii. 以降 *Greene, Carols*と略記。
- 4 Duffy, E., *The Stripping of the Altars: Traditional Religion in England 1400-1580* (New Haven and London, 1992), p. 15.
- 5 拙稿「十五世紀のキャロル写本MS. Eng. poet. e. 1に関する史料論的分析」『お茶の水史学』47 (2003年)、1-37頁。
- 6 Greene, *Carols*, pp. 297-341.
- 7 たとえば次の研究がある。Boffey, J., *Manuscripts of English Courtly Love Lyrics in the Later Middle Ages* (Woodbridge and Dover, 1985).
- 8 16世紀にキャロルが減少したのは、キャロル以外の文学形式が発展したためであると言われる。*The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, vol. 5, p. 170.
- 9 当該写本には、十字架上のキリストと聖母マリア、福音書記者聖ヨハネの会話からなる英詩が収められた。この英詩と同じテキストが、15世紀の2写本と16世紀の写本、印刷本では、バーデンを付け加え、詩節に分割することで、キャロルの形式に作り変えられて残っている。
- 10 Wenzel, S., *Preachers, Poets and the Early English Lyric* (Princeton, 1986), pp. 101-73.
- 11 Greene, *Carols*, p. 327; Boffey, J. and Thomson, J., 'Anthologies and Miscellanies: Production and Choice of Texts', in Griffiths, J., and Pearsall, D. eds., *Book Production and Publishing in Britain 1375-1475* (Cambridge, 1989), pp. 279-315, esp. p. 293.
- 12 Whiting, E. K. ed., *The Poems of John Audelay*, Early English Text Society, Original Series, No. 184 (Oxford, 1931).
- 13 Greene, *Carols*, p. 321.
- 14 *Ibid.*, p. 312.
- 15 筆者が写本の現物を確認したところ、先行研究では言及されていないが、ジョン・バーデルは35葉裏に '[item] For the dy dye of Cley xxv s & iiii d' (Cleyの日のため、25シリング4ペンス)と書いたことが分かった。これは会計記録と考えられる。ノーフォークの海岸沿いの村の名に、Cleyという地名があるが、「Cleyの日」が何を指すのかは分からない。Clay (粘土) を指す可能性もある。あるいはdyeとは「日」ではなく染料を指す可能性もある。
- 16 Greene, *Carols*, p. 307.
- 17 *Ibid.*, pp. 299-301.
- 18 *Ibid.*, pp. 314-15.
- 19 Taylor, A., 'The Myth of the Minstrel Manuscript', *Speculum* 66(1991), pp. 43-73, esp. p. 65.
- 20 Jurkowski, M., 'The "Findern Manuscript" and the History of the Fynderne Family in the Fifteenth Century', in Scattergood, J. and Boffey, J. eds., *Texts and Their Contexts: Papers from the Early Book Society* (Dublin, 1997), pp. 196-222.
- 21 Meale, C. and Boffey, J., 'Gentlewomen's Reading', in Hellinga, L. and Trapp, J. B. eds., *The Cambridge History of the Book in Britain, vol. III, 1400-1557* (Cambridge, 1999), pp. 526-40, esp. p. 535.
- 22 ロンドンでのチョーサーなどの作品の書写、写本の流通については以下を参照。Greenberg, C., 'John Shirley and the English Book Trade', *The Library*, 6<sup>th</sup> Series, 4 (1982) pp.369-80.
- 23 Douce 302写本のキャロルのテキストには、写本作成に関わった聖職者の意図が反映されていると考えられる。しかし、同じテキストであっても、ミンストレルが歌った時には、聖職者が歌った時とは異なる意味を持ったのではないだろうか。歌われる場に応じたキャロルのテキストの意味の変化については、今後の課題としたい。
- 24 大英図書館Add. 31922写本は、ヘンリ8世が作詞・作曲したというキャロルを収め、「ヘンリ8世写本」と呼ばれる。
- 25 Stevens, J., *Music and Poetry in the Early Tudor Court* (London, 1961), pp. 3-8.
- 26 Dyboski, R., *Songs, Carols, and Other Miscellaneous Poems from Balliol MS. 354*, Early English Text Society, Extra Series, No. 101 (Oxford, 1907), pp. xix-xxi.
- 27 Reed, E., *Christmas Carols Printed in the Sixteenth Century: Including Kele's Christmas Carols Newly Inpnynted, Reproduced in Facsimile from the Copy in the Huntington Library* (Cambridge, 1932).
- 28 本稿注9参照。
- 29 Boffey and Thompson, 'Anthologies and Miscellanies: Production and Choice of Texts', pp. 293-94; Duffy, *The Stripping of the Altars*, pp. 73-75.
- 30 Remley, P. G., 'Mary Shelton and Her Tudor Literary Milieu', in Herman, P. C. ed., *Rethinking the Henrician Era: Essays on Early Tudor Texts and Contexts* (Urbana and Chicago, 1994), pp. 40-77.
- 31 Stevens, *Music and Poetry in the Early Tudor Court*, p. 351.
- 32 *Ibid.*, p. 4.

表 1 キャロル写本群 (15世紀まで)

表の見方 1. 写本の作成年代順に、世紀の初頭・半ば・末期・詳細不明の順に並べた。さらに、各年代の中では、所蔵館のアルファベット順に並べた。

2. 略記した写本の所蔵館名は次の通り。BL: British Library(大英図書館) NA: National Archives(イギリス国立公文書館)

3. 写本情報は、以下の順で示す。所蔵館名、写本名 [写本中に収められたキャロルの数: 来歴・所有者に関する特記事項]

年代	説教、文学作品などと共にキャロルが収集された写本	主にキャロルが収集された写本	その他の写本、写本の断片
13世紀 詳細不明	BL, Egerton 613 [1] Cambridge, Trinity College B. 14. 39 [1]		
14世紀 初頭 半ば 末期	BL, Harley 2253 [1] London, Lincoln's Inn, Hale 135 [1] Oxford, Bodleian Bodley 26 [1] BL, Harley 7358 [ 2:ラテン語論文、1374年の遺言書の書式。ドーセット、イースト・ルルウォース近郊の村チャルドン・ヘリングの主任司祭 John Sperhauck が書写した。] Edinburgh: National Library of Scotland, Advocates 18. 7. 21 [ 3: フランシスコ会修道士グリムストーンのジョンが書写した。] London, University of London 657 [ 1:15世紀にはノーフォーク、ブラックニーの教区司祭ロバート・ダイヤーが所有した。] New Haven, Connecticut: Yale University, Beinecke Rare Book and Manuscript Library, Osborn Shelves a. 1 [1]		
15世紀 初頭	BL, Royal 20. A. I [2] BL, Add. 5666 [3] Callow End, Worcester: Stanbrook Abbey 3 [2: 15世紀の所有者は、ウィルトシア、バーウィック・セント・ジョンの主任司祭ジョン・モートン。] Cambridge, Trinity College R. 4. 20 [2] Cambridge, Trinity College R. 14. 26 [1: ラテン詩に楽譜付き。] Cambridge, University Library Add. 5943 [ 5: 1418年の所有者はカルトジオ会修道士。他に hennynghs harper という名前もある。] Oxford, Bodleian Rawlinson C. 506 [1]	BL, Sloane 2593 [57: ラテン詩3篇、そのほかにも英詩を収める。所有者としてベリー・セント・エドモンズの修道士ジョン・バーデルの名前が記された。] Cambridge, Trinity College O. 3. 58 [13: キャロルの書かれた裏に、ミサ曲が書かれた。全てのキャロル・詩に多声音楽の楽譜付き。] Oxford, Bodleian Douce 302 [25: シュロップシア、ハウモンド修道院の礼拝堂付き司祭、ジョン・オードリーが作成した詩・キャロルを収める。所有者としてミンストレルの名前が記された。]	NA, Chancery Miscellanea, C34/1/12 [ 2: 2葉のみ現存する写本の断片。]



<p>15世紀 半ば</p>	<p>BL, Add. 31042 [ 3 : ヨークシャーのジェントルマン、ロバート・ソーントンが書写した写本だが、キヤロルはソーントンとは違う人物が書写した。 ]                  BL, Harley 5396 [ 3 : 会計記録や手紙の写しを収める。キヤロルを書写した人物は、商人か徒弟であった可能性があると言われるが証拠はない。 ]                  BL, Royal 17. B. XLIII [ 1 ]                  Cambridge, Gonville and Caius College 383 [ 9 : オックスフォード大学モードリン・カレッジの聖歌隊員のコモンプレイス・ブック。 ]                  Cambridge, Trinity College O. 9. 38 [ 3 : グラストンペンベリ修道院の修道士のコモンプレイス・ブック ]                  San Marino, California: Henry E. Huntington Library and Art Gallery, HM 147 [ 1 ]</p>	<p>BL, Egerton 3307 [ 12 : ミサ・行列用賛歌、キヤロル、ラテン詩を収める。多声音楽の楽譜付き。ヨークシア、ベヴァリ近郊のシトラー会修道院 (Meaux Abbey) で使われていたとの説が有力。 ]</p>
<p>15世紀 末期</p>	<p>BL, Harley 1317 [ 1 : 会計記録も収める。 ]                  BL, Royal 19. B. IV [ 1 ]                  BL, Add. 14997 [ 1 ]                  Cambridge, Corpus Christi College 233 [ 1 : ケンブリッジ大学、キングス・カレッジに1479年に入ったウイリアム・ハンブシアが書写した。 ]                  Cambridge, Trinity College O. 2. 53 [ 1 ]                  Cambridge, Trinity College O. 7. 31 [ 2 ]                  Cambridge, University Library Ff. 1. 6 [ 2 : ジェントリ、フィンダーン家に置かれた。 ]                  Cambridge, University Library Ff. 5. 48 [ 1 ]                  Cambridge, University Library li. 4. 11 [ 1 : 写本の大部分は14世紀、キヤロルは15世紀に書写された。 ]                  Canterbury Cathedral Library Add. 68 [ 1 : ヨークシア南部。 ]                  Edinburgh: National Library of Scotland, Advocates 19. 3. 1 [ 3 ]                  Lambeth Palace, Lambeth 306 [ 2 : 年代記 Brut を収める。 ]                  National Library of Wales, Pokington 10 [ 5 ]                  New Haven, Connecticut: Yale University, Beinecke Rare Book and Manuscript Library, 365 [ 1 : サファクのジェントリ、コーンウォリス家の使用人口バート・メルトンの会計記録を含む。 ]                  Oxford, Bodleian Add. A. 106 [ 1 : 6写本群の集成。 ]                  Oxford, Bodleian Ashmole 1379 [ 1 ]</p>	<p>Cambridge, St John's College S. 54 [ 20 ]                  Cambridge, University Library Ee. 1. 12 [ 111 : 説教の英訳も収める。カントバリのフランシスコ会修道士ジェイムズ・ライマンが書いたキヤロルを収める。 ]                  Oxford, Bodleian Eng. poet. e. 1 [ 72 : キヤロルに類似の詩も合わせると76篇。一部楽譜を収める。 ]</p> <p>Bridgewater, Somerset: Town Hall, Bridgewater Corporation Muniments, 23 [ 1 : 1471年のインデンチュアの写しの裏にキヤロルが書かれた。 ]                  Cambridge, University Library Add. 7350, Box 2 [ 3 : 2葉のみ現存する写本の断片。 ]                  NA, Exchequer Miscellanea, E 163/22/1/1 [ 1 : グロスターでの反乱の調査に関する文書 (1457年)の裏に書かれた。 ]</p> <p>San Marino, California: Henry E. Huntington Library and Art Gallery, El. 1160 [ 1 : ノーサンプトンシアで作成された。 ]</p>

<p>15世紀 詳細不明</p>	<p>BL, Harley 275 [1: ロンドン司教トマス・ケンプからの手紙の写し (1451年) を収める。] BL, Harley 541 [2] BL, Harley 2330 [1] BL, Harley 2380 [1] BL, Royal 17. B. XLVII [1: 手紙の書式を収める。] BL, Sloane 1584 [1: 写本の大部分はヨークシア、コヴェンハムのブレモントレ修道会の聖職者が書写した。] BL, Add. 19046 [1] BL, Add. 20059 [1] Dublin: Trinity College E. 5. 10 (516) [1] Manchester, John Rylands Library, Lat. 395 [2] Oxford, Bodleian Ashmole 1393 [2] Oxford, Bodleian Ashmole 189 [2] Oxford, Bodleian Laud Misc. 601 [1] Oxford, Bodleian Laud Misc. 683 [2: 写本の一部は17世紀に書かれた。] Oxford, Bodleian Rawlinson Poet 34 [1] Oxford, Lincoln College Lat. 100 [1: 写本の一部は12世紀に書かれた。] Oxford, Lincoln College Lat. 89 [1: 楽譜付き。] University of Glasgow, Hunterian Museum, 83 (T. 3. 21) [3: 英詩1篇に楽譜付き。] Westminster Abbey, 20 [1]</p>	<p>Oxford, Bodleian Arch Selden B. 26 [24: キヤロル以外の英詩も収められ、全ての詩に多声音楽の楽譜が付された。ウスター大聖堂に置かれたと指摘される。]</p>	<p>BL, Cotton Vitellius D. XII [1: 1葉のみ現存する写本の断片。] Cambridge, University Library L1. 11 [1: 1葉のみ現存する写本の断片。] BL, Add. 40166 [2: 2葉のみ現存する写本の断片。グロスターシア、シトー会のヘイルス修道院に置かれた。] Kent Archives Office, K. A. O. U 182 Z1 [1: 1葉のみ現存する写本の断片。]</p>
----------------------	--	--	--

表2 キャロル写本群 (16世紀)

表の見方は表1と同じ。

年代	説教、文学作品などと共にキャロルが収集された写本	主にキャロルが収集された写本	その他の写本、写本の断片	印刷本
16世紀 初頭	BL, Cotton Vespasian A. XXV [1] BL, Add. 5465 [ 8 : 楽譜付きで、作曲家名も書かれている。その一人は、宮廷音楽家のロバート・フェアアックス。] BL, Add. 17492 [ 3 : トマス・ワイアトの詩を収める。] BL, Add. 31922 [ 6 : キャロル以外の英詩も収め、すべての詩に楽譜がついている。作詞・作曲家の名前も書かれた。ヘンリ8世が作詞作曲したというキャロルも収められた。] BL, Lansdowne 379 [ 2 : 写本の一部は印刷されている。] BL, Royal Appendix 58 [ 4 : リュート用の楽譜も収める。] Dublin, Trinity College, D. 2. 7 (160) [ 1 : トマス・ワイアトの詩。ワイアトの友人 George Blague によって編まれた。] London, College of Arms, I. 7. Records of Coronations and Other Ceremonies [ 1 : エドワード6世の入式式の描写を収める。] Tokyo, Toshiyuki Takamiya, Takamiya 6 [1]	BL, Add. 5665 [41 : 多声音楽の楽譜付き。ラテン語やフランス語の詩も収める。] Oxford, Balliol College 354 [78 : ロンドン市民リチャード・ヒルのコモンプレイスブック。]	BL, Printed Book C. 21. x. 12 [ 1 : 印刷本 (1518年) の余白にキャロルが書写された。] Canterbury Cathedral Library, Christ Church Letters, vol. II, No. 173 [ 1 : 1葉のみ現存する写本の断片。] Canterbury Cathedral Library, Christ Church Letters, vol. II, No. 174 [ 1 : 1葉のみ現存する写本の断片。]	BL, Printed Book C. 39. B. 17 [ 1 : 出版者ジョン・ラステル (1520年ころ)。] San Marino, California: Huntington Library and Art Gallery, Here Followythe dyvers Balettyss and dyties solacyous deusydy by Master Skelton Laureat. [ 1 : 出版者リチャード・ピンソン (1520年ころ)。] Oxford, Bodleian Rawlinson 4to. 598 [ 2 : 出版者 Wynkyn de Worde (1521年)。1葉のみ現存。] BL, Printed Book MK. 8. k. 8 A [ 1 : 1葉のパンプレット。出版者ジョン・ラステル (1525年ころ)。] BL, Printed Book K. 1. e. 1. [ 1 : 1530年口本で出版された。出版者不明。] Oxford, Bodleian Douce Fragments f. 48 [ 2 : 出版者ウィリアム・コブランド (1550年ころ)。] San Marino, California: Huntington Library and Art Gallery, Christmas Carolles newly Imprinted. [22 : リチャード・キールにより1550年ころ刊行されたパンプレットと他の印刷本の集成。キールのパンプレットにはキャロル4篇が収められた。]
半ば				
末期	BL, Harley 4294 [3] Cambridge, Magdalene College Pepys 2553 [ 1 : スコットランドの詩の集成。ウィリアム・ダンバー作のキャロルを収める。] Edinburgh: National Library of Scotland, Advocates 1. 1. 6 [ 3 : 430篇の詩の集成。エディンバラの商人 George Bannatyne が書写した。] BL, Add. 18752 [ 1 : ラテン語の論文、手紙の写しなどを収める。キャロルはトマス・ワイアトの作。] BL, Cotton Julius B. XII [1] BL, Cotton Titus A. XXVI [1] BL, Harley 7578 [ 1 : 複数の写本群の集成。] University of Pennsylvania Library, Lat. 35 [1]			
詳細不明				